

「あるがまま」の生き方に導かれて(二)

「森田」を職場や家庭、地域社会で生かさせていただいたお陰であります。或いは、むしろ、「やむを得ず、生かさざるを得なくなった」と言っただ方が妥当かも知れませんが、

これらの経験は、前述の四、学習と実践の継続「継続の力」でも一部述べさせていただきましたが、これに引き続き、以下に述べたいと思います。そのうち、P・T・A・活動に生かして、は、「生活の発見」誌の「特集・生涯学習について」に掲載されたものです。地域社会における未知の分野への私の体験を述べさせていただきますましたものであります。

生活の発見会創始者の長谷川洋三先生は、この特集号の中で、生涯学習として「森田」を考えた場合、大切な点として、次の四点をあげておられます。

第一、自然に従って生きる。自然に従うことの大切さを教えてくれる。

第二、環境に従いながら環境を変えていく。生活環境に従いながらこれをよりよい方向に変えていく。

第三、常に新しい課題に挑戦していく生活態度、そういうものを養っていく。

第四、今を生きる。

この様な姿勢がありますが、生涯にわたって人間らしい生き方を示唆してくれるものと、言われているように思います。これらのことは「森田」と「生活の発見会」活動を継続する中で、徐々に身についてくるものであります。

「森田」的生き方のキーワードである「あるがまま」と「目的本位」……。 「不安はあるがままに、目的本位に進む」という「あるがまま」の生き方に導かれ、粘り強く、実生活をすすめてゆくうちに、とつてい実現不可なことだと思ひこんでいた私の職場におきまして、自己実現できるようになったのでした。そのように、私にとってはきわめて困難な場であった職場においてさえ、「森田」を生かし、「あるがまま」に進んでゆく生活を見出すことが出来た事実を述べましたのが、「あるがままについて」と、「三」治るとはどういうことか」であります。

「職場での仕事面における自己実現は、私としては最も困難なこと」との思いが強かったですし、事実その実現には時間がかかりましたので、最後に述べることとなりました。

これら二つの文章は「生活の発見」誌の「学習会シリーズ」に掲載されたものであります。「生活の発見会」における学習会で取り上げる八つのテーマのうちの二つのテーマについて、困難な職場での実生活と関連させて述べております。

理論をどのように実践に生かすことができたか、ご理解いただければ幸いです。森田の理論の科学としての普遍的な強さが実証できていることを嬉しく思います。

(続)